

フェミニスト批評から漫画家の社会学の方へ

——岡本かの子の場合——

椋山女学園大学 鎌田大資

1、目的

岡本かの子は、日本で最初のストーリー漫画の描き手で、大正期を代表する漫画界のスター作家であった一平の妻であり、日本を代表する前衛絵画作家である太郎の母でもある。まさしく創作活動に一生をささげた一家三名の人物および作品は、これまでもたびたび考察の対象となり、論じられてきた。

かの子とその作品については、明治、大正期特有の自己表出の担い手として、主にフェミニスト批評の分野で解釈が蓄積されている。過去に出版された全集は1990年代に文庫化され、広く読まれたと思われる。本年度のセンター入試の現代文の問題にも取りあげられた。また現在、一平、かの子の時代において対照的な社会批評の担い手として、自覚的な思想、表現活動を展開したプロレタリア漫画家の柳瀬正夢(やなせまさむ)の表現活動に関する見直しが進められてもいる。時代の寵児となって宗教思想の方面に沈潜することで露骨な社会批判を避けた一平、かの子の活動と対比的な検討をおこなう素材が掘り起こされはじめている。時の政権によってクールジャパンを海外にもアピールして外貨獲得を目指す動きも散見されるなか、日本の漫画文化をその根底にさかのぼって見直す機運は熟しつつあるといえる。このように一平、かの子の創作活動を新たな視点から見直す状況が整備されつつある時の利を活かして、現在、報告者が取り組みつつある公共圏としての日本漫画史研究の文脈にかの子の業績を位置づけ、現在、有力な女流文芸の一分野として確立されてきた少女マンガ、女性向けマンガの先駆者として、かの子を改めて位置づけなおす。

2、方法

岡本かの子の文学の再検討に向けた一連の作業として以下の視点からの検証をおこなう。1、かの子に関する過去の解釈史の振り返り。2、岡本家の創作活動、3、大正、明治期の印刷メディア、4、江戸期以降の印刷メディアにおけるビジュアル公共圏の歴史としての日本の漫画史などのなかでのかの子文学の位置づけ、再検討。

3、結果

かの子の作品は一平の庇護のもとに、彼の監修を受けて世に送り出されたいわば合作であり、そのパブリック・イメージもまた一平や太郎の追憶、回想のなかで独自の色づけを施されたものである。また、かの子の創作が始まる最初期に、一平の自伝的小説作品のなかでその求婚期の人となりキャラクター化されて伝えられてもいる。そうした土台のうえに花開いたかの子の文学は本人の唯一無二の個性の刻印を受けて、一平にも太郎にも不可能な高みをきわめた。かの子が切り開いた「家霊」「河の精霊」の刻印を受けた女性像は、日本の文化史の一部となって文芸表現やビジュアルな物語文芸としてのマンガ史に継承され、新たな生命を獲得している。

4、結論

かの子文学を、現代社会に花開いた女流文芸の有力な一角としての少女マンガ、女流マンガの大きな潮流と結びつけ、平安時代以来の女流の文学表現の巨大な渦の一部として捉えなおすことができた。

参考文献

熊坂敦子編、1976、『岡本かの子の世界』冬樹社